文　　献

1）William,J.K.: 骨粗鬆症 ― 診断、治療、予防について ―．東日本臨整 2 : 67－74, 1990.

2）森田陸司、山本逸雄、高田政彦、ほか：骨塩定量法の現状と問題点．日内会誌82 : 1994－1998, 1993.

3）山本逸雄、森田陸司：骨量測定の進歩と問題点．臨床医20 : 35－39, 1994.

4）萩原聡、Harry,K.G.：新しい骨塩量定量法．医学のあゆみ165 : 633－636, 1993.

5）串田一博、長谷川友亮、川名孝一、ほか：pQCTによる橈骨骨密度測定．新医療 : 62－64, 1994.

6）藤井芳夫、高木康行、宮内章光、ほか：pQCTによるDistal RadiusのBMD測定．Osteoporosis Japan 2 : 291－293、1994.

7）Pocock、N.R.et al : Limitations of forearm bone densitometry as an index of vertebral or femoral neck osteopenia.J. Bone Miner.Res. 1 : 369－375, 1986.

剖検について

副院長　滝本昌俊

最近、当病院においては、亡くなった患者さんの病気を本質的に理解するために、剖検をさせてもらおうという気運が高まっているようです。剖検（病理解剖ともいいます）は、多くの医学上の知見をもたらしますが、その成果は医師のみが享受するものではありません。亡くなった患者さん自身にとっても有意義であること、遺族にもその成果が理解されることが必要です。また院内の各職域のスタッフにも間接的にせよその成果がもたらされるはずです。

剖検することが必要なまたは望ましい状況とは何でしょうか。私見を述べますと、

1）患者さん自身の生前の意志があった場合もしくは遺族の要請がある場合。

2）亡くなるまでの経過中にどうしても診断病名がつかなかった場合。

3）基礎疾患の診断はついているが、直接死因が不明でその検索によって、以後、同じ疾患の治療に関し有益な示唆が得られることが予想される場合。

剖検に立会ったことがある人ならよくわかることと思いますが、剖検は亡くなった患者さんの病気の自然歴や医学上の重要な性質など病気の本質を理解するきっかけになるものです。また遺族から剖検の許しをもらうためには普段から温かみのあるかつ医学的レベルの高い診療をしていることが必須です。多数の剖検のできる病院が、専門家の間で高い評価を受けるのはこのためです。

病院に信頼を寄せてくれる一般市民のためにも、剖検は積極的にすすめたいものです。